

暮らしから始まる学び舎 —みどりとともに生きる新たな拠点—

prologue

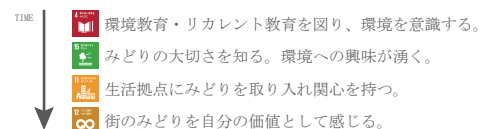
全国で緑地は減少している。特に少ない東京都在住の人は自然環境を感じて生活しているのだろうか。
私は、幼少期から東京で育ち、環境教育を受けてきました。しかし、大学の授業で環境教育について深く学んだことで、私も小さい頃から、実際に自然に触れ合いながら、学びたいという思いから生活環境の違いによって、自然環境に対する意識に差があってよいのか違和感を併研究を始めた。

problem

親の居住地や生活環境によって、自然への興味関心が変化していることや経済の中心である都心に生活することで、心のゆとりを持ってない人が一定数いることがある。
都心にみどりの拠点を増やすことで、人々の自然環境への興味関心を高めること、心にゆとりや安らぎを与えることはできないかと考えた。緑地の中で生活や異分野の人との交流機会をもたらすことで、生活環境を見渡すゆとりを持ち始め、よりよい環境を創生する環境学習に取り組めるのではないかと。

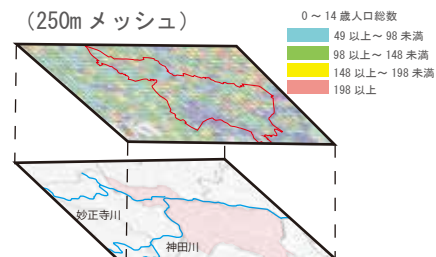
proposal

対象敷地にて都市生活者がみどりと共存し、過去にあった教育施設の記憶を景観化しつつ新たな地球環境教育施設として生まれ変わらせる。身近に自然を体感できる空間を創出することで、住民一人一人が日常の中で自然と共に暮らす根源となる空間を具体化するものである。



SDGs

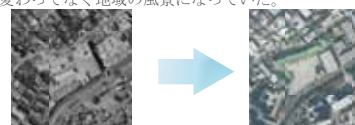
2015 年 0 ～ 14 歳人口総数 (250m メッシュ)



新宿区周辺の環境資源

— 中野区立第三中学校 —

1947 年から 2017 年まで 70 年間の歴史あり、校舎の形は、昔から大幅に変わってなく地域の風景になっていた。



site analysis



Design aproachs

森の中に居場所を作ること、いつのまにか人が集まり、身近に自然を感じられると考えた。仕掛けのための感情、行動をデザインコードにまとめ設計した。



program



プログラムにてそれぞれ学びがあり、プログラムの組み合わせによって新たな学びがある

Design process

デザインプロセスとして、建築、土地のランドスケープ、植林のランドスケープ、旧校舎の面影に4つに分類し、設計していった。



敷地内の土地を利用して、土を外に出さず、憩いの空間にするために敷地に抑揚をつけランドスケープとアーキテクチャの一体化を図り、自然化する。また、木々の中で人の活動が生まれ、木々の中に建築を設計する。

旧校舎の建築入口までの動線、廊下、コアをデッキにした。また、柱の位置に植林した。デッキを歩きながら、旧校舎を思い出す。

木々は成長する。訪れた季節によって、人の動きに変化がある。日照解析、日影解析により敷地内を大きく3つの空間にわけた。それぞれの接線が大まかな人の動線になる。

広葉樹林の中での人の行動

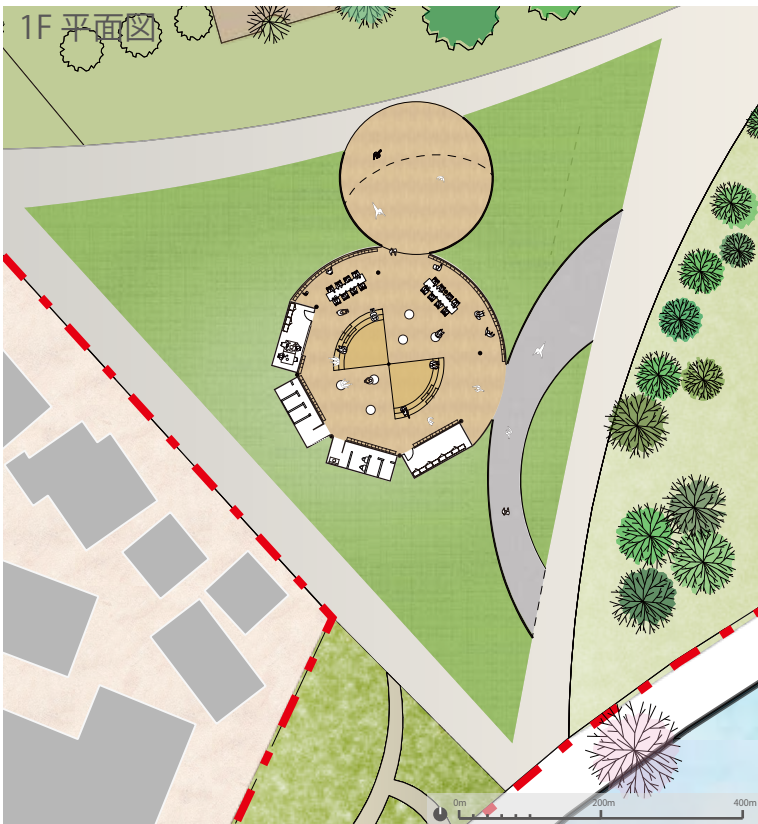
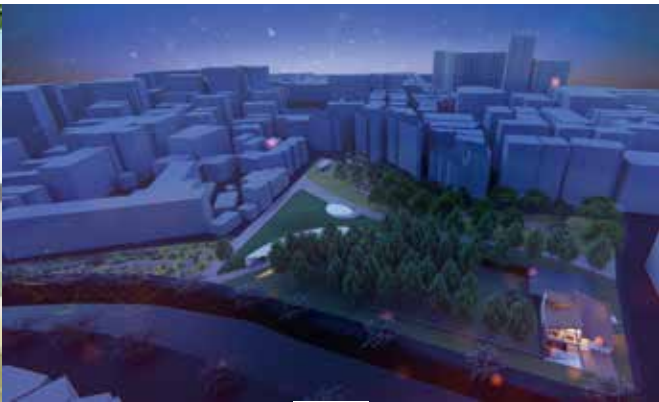


配置図



針葉樹林の中での人の行動





生態系が多く集まり、
新たな出会いがある



知らなかったことや
興味を持ったことを学べる



地域ギャラリー地域の魅力を知る



地域ギャラリー後：地域のお店を訪れる



様々な植物があり、
環境資源を見る・拾うことができる



集めた資源を使いモノづくりをする



自然をのなかで料理をつくる



自然の中で食事を楽しめる

